

「決して滅びない言葉」

ルカ 21:29-33

2020. 11. 1 南与力町教会朝拝

序：文脈—終末に至るまでに起こる出来事

イエス様の終末に関する説教を順番に学んでいます。今朝の御言葉は「それから、イエスはたとえを話された」という言葉で始まっています。ここまでは一続きに語られてきたのですが、今日のところで一区切りついていることがわかります。イエス様はこれまで終末に至るまでどのようなことが起こるのか、どのような徴があるのかを語ってこられました。偽メシアが大勢現れること、戦争や暴動が起こること、民族と民族、国と国とが対立し合うこと、大きな地震、飢饉、疫病が方々に起こること、恐ろしい現象、天に大きな徴が現れること。しかしこのようなことがすべて起こる前に弟子たちへの厳しい迫害が起こること。そしてエルサレムが軍隊に包囲され、滅亡すること。そして太陽と月と星に徴が現れ、地上では海が荒れ狂い諸国の民が不安と恐れに陥ること。そしてその後、人の子(イエス・キリスト)が力と栄光に満ちて来られること。イエス様はそのように終末に至るまでの出来事を語ってこられたのでした。

1. いちじくの木からの教訓—神の国が近いことを悟りなさい (21:29-31)

その後、今日の箇所ではイエス様は一つの短いたとえを語られました。21章 29～31節

「それから、イエスはたとえを話された。「いちじくの木や、ほかのすべての木を見なさい。葉が出始めると、それを見て、既に夏の近づいたことがおのずと分かる。それと同じように、あなたがたは、これらのことが起こるのを見たら、神の国が近づいていると悟りなさい。」

「いちじくの木」は冬には葉が落ちてしまい、春に再び葉が出始め、初夏には実を結びます。他の多くの木、樹木も同じようになるでしょう。それゆえ 30 節にあるように「葉が出始めると、それを見て、既に夏の近づいたことがおのずと分かる」と言われています。しかし私たちにとっては木から若葉が出てくるのを見ると、「夏が近づいた」というよりも「春が来たなあ」と思うのではないかと思います。ここには日本とパレスチナとの気候の違いが関係しています。パレスチナでは春が非常に短く、冬が終わるとすぐに夏が来るようです。今のパレスチナの気候を調べてみますと、冬は 3 月 9 日までで、そこから気温が上がり春となります。そして 5 月 24 日には最高気温が 33 度に達し、暑い夏となります。3 月に春が来て、5 月にはもう夏になる。私たちの住む日本よりも格段に夏が来るのが早いのです。そう考えるとイエス様が「葉が出始めると、それを見て、既に夏の近づいたことがおのずと分かる」と言われたことも理解できると思います。

そしてイエス様はこのたとえの適用として 21 章 31 節で次のようにお語りになっています。

「それと同じように、あなたがたは、これらのことが起こるのを見たら、神の国が近づいていると悟りなさい。」

「これらのこと」とはイエス様がこれまで語ってこられたこと、終末に至るまでに起こる出来事です。それらが起こるのを見たら、神の国が近づいていると悟りなさい。それがたとえの結論です。これと似たようなことはすでに 28 節で語られていました。「このようなことが起こり始めたら、身を起こして頭を上げなさい。あなたがたの解放の 때가近いからだ」。そのことが改めてたとえでも教えられているのです。ではこのたとえのポイントはどこにあるのでしょうか。

このいちじくのたとえはマタイやマルコ福音書にも記されています。それらの並行箇所と比べると少し言葉遣いが異なっていることに気づきます。その一つはルカにだけ 30 節で「おのずと」という言葉があるということです。この言葉は「自分で、自分から」という意味があります。30 節は次のように訳すこともできます。

「葉が出始めると、自分でそれを見て、すでに夏の近づいたことが分かる」。

そして、それと同じように、あなたがたも自分でこれらのことが起こるのを見たら、神の国が近づいていると悟りなさい、と言われていたのです。自分で見て、悟るといのがこのたとえのポイントではないかと思えます。

イエス様は 21 章 8 節で偽メシアが現れ、また「時が近づいた」という偽預言者が現れること、そしてそういう人々に惑わされず、後について行かないように注意を促しておられました。実際、歴史の中では「終わりの時が近づいた。もうすぐ世が滅びる」と言う人々が多く出てきました。日本でも「ノストラダムスの大予言」というものが一時期流行ったことがありました。それは 1999 年の 7 月に人類が滅亡するとう内容です。当時の朝日新聞（1999 年 7 月 1 日の夕刊）の記事によると、当時の大学生の半数近くが不安を感じていたそうです。ノストラダムスの大予言など今となってはバカらしいと思われるでしょうか、少なくとも当時のかなりの人がそのことで不安を感じていたのです。しかしイエス様はそういう人々の言葉に惑わされないように予め警告されていたのです。

そして今日のところでは、起こることを自分で見て、悟りなさい、と教えられています。すなわち人から「終わりが近づいた」と言われて、不安になるのではなく、むしろ自分でこれらのことが起こるのを見て、「神の国が近づいた」と悟るように、ということです。しかも、それを人類や世界の滅亡が近づいているというように恐れをもって知るというのではなく、「神の国が近づいている」、すなわち私たちの救い（贖い）が近づいているということをも希望をもって知り、悟りなさいと言われていたのです。

「夏」はいちじくの実がなる収穫の季節であり、喜びの時です。葉が出始めるのを見ると、近づきつつある夏を楽しみに待つのだと思えます。それと同じように、私たちも近づきつつある神の国を楽しみに、希望をもって待つように言われているのです。

2. 決して過ぎ去らない（必ず実現する）主イエスの言葉（21:32-33）

(a) すべてが起こるまでは過ぎ去らないこの時代

そしてたとえに続いてイエス様の二つの言葉が記されています。

一つ目が 21 章 32 節です。

「はっきり言うておく。すべてのことが起こるまでは、この時代は決して滅びない。」

直前の 31 節では「神の国が近づいていると悟りなさい」と言われていましたが、ここでは「この時代は決して滅びない」と言われています。これは前後関係がうまくつながらないようにも思えますが、これはイエス様があえてこのように言われたのだと思えます。イエス様はこの 32 節の言葉によって、終末の徴を見て、「神の国が近づいている」と悟ったとしても、あまりに性急に「この時代（この世）がもうすぐ滅びる」と考えて浮足立つことがないように戒めておられるのだと思えます。

イエス様は「はっきり言うておく。すべてのことが起こるまでは、この時代は決して滅びない」と言われます。「滅びない」と訳されている言葉は「過ぎ去らない」という言葉が使われています。では「すべてのことが起こるまでは決して過ぎ去らない」「この時代」とはどういう時代でしょうか。ルカ福音書 11

章 29 節でイエス様は次のようにおっしゃっていました。

「今の時代の者たちはよこしまだ。しるしを欲しがすが、ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられない。」

この「今の時代の者たち」と今日の箇所「この時代」とは同じ言葉です。イエス様にとって今の時代（この時代）は、よこしまな時代、しるしを見なければイエス様を信じようとしなない不信仰な時代、神に背いた時代なのです。他の箇所でも同じように「この時代」は「よこしまな時代、邪悪な時代」として語られています（ルカ 7:31、9:41、使徒 2:40）。それゆえ今日の箇所でも「この時代」はそのような意味で捉えるべきでしょう。今は神に背いたよこしまな時代、邪悪な時代です。しかしイエス様が言われたすべてのことが起こるまでは、そのような時代も決して滅びない、過ぎ去らない。そのようにイエス様は言われたのです。そうであるならば、私たちはイエス様が言われたことの一つ、あるいはいくつか起こったのを見たとしても、そのことをもってすぐにこの時代が滅びる、過ぎ去ると考え、浮足立つべきではないのです。「神の国は近づいている」という確信と期待を持ちつつも、「すべてのことが起こるまではこの時代は決して過ぎ去らない」というイエス様の言葉に基づいて、冷静に、地に足をつけて歩み、生活していくべきです。

(b) 天地が過ぎ去っても決して過ぎ去らない主イエスの言葉

そして今日の箇所の最後の言葉が 21 章 33 節です。

「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」

前の 32 節では「この時代は決して滅びない」と言われていたのに、ここでは「天地は滅びる」と言われていますので、一見矛盾しているようですが、そうではありません。すべてのことが起こったときには、この時代も滅びる、過ぎ去っていくのです。そしてそのときにはこの「天と地」も滅び、過ぎ去っていきます。しかしそのような時にも「わたしの言葉」すなわち主イエス・キリストの言葉は決して滅びない、決して過ぎ去っていくことはないのです。このイエス様の言葉は旧約聖書のイザヤ書 40 章 6～8 節を思い起こさせます。

「呼びかけよ、と声は言う。わたしは言う、何と呼びかけたらよいのか、と。肉なる者は皆、草に等しい。永らえても、すべては野の花のようなもの。草は枯れ、花はしぼむ。主の風が吹きつけたのだ。この民は草に等しい。草は枯れ、花はしぼむが／わたしたちの神の言葉はとこしえに立つ。」

私たち肉なる人間は草や花のようにやがては枯れ、しぼんでいきます。しかし私たちの神の言葉はとこしえに、永遠に立ち続ける。イエス様の言葉もそのような神の言葉なのです。私たちが確かなものだと思っている天と地、この世界もやがて過ぎ去っていきます。しかしそのような時にも主イエスの言葉は過ぎ去ることなく、永遠に立ち続けるのです。変わることなく有効であり続ける。それは天地が過ぎ去ったとしても主イエスの言葉が必ず実現するということでもあります（イザヤ 55:10-11 参照）。それでは天地が過ぎ去った後、一体何が実現するのでしょうか。それは主イエスがお語りになった「神の国」が実現するのです。主イエスの到来によって近づき、今も近づきつつある「神の国」が完全な仕方で到来します。では天地が過ぎ去った後に実現し完成する「神の国」とは一体どんなものなのでしょうか。

ヨハネの黙示録 21 章 1～4 節にはヨハネが見た幻が記されています。

「わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は去って行き、もはや海もなくなった。更にわたしは、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神

のもとを離れ、天から下って来るのを見た。そのとき、わたしは玉座から語りかける大きな声を聞いた。

「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のもは過ぎ去ったからである。」

私たちの生きるこの世界にはなお死があり、悲しみ、嘆き、労苦があります。しかし最初の天と地が過ぎ去り、新しい天と地が現れる時、神の国が完全な仕方で実現します。神ご自身が私たちと共にいて、私たちの目からすべての涙をぬぐい取ってくださる。そしてそこには「もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない」そのような神の国が実現するのです。これは私たちが勝手に思い描き期待している夢ではありません。主イエスご自身が「神の国は近づいた」と宣べ伝えられ、「これらのことを見たなら、神の国が近づいていると悟りなさい」とおっしゃっておられる、約束しておられるのです。そしてその主イエスの言葉は天地が滅びても、決して滅びることのない永遠に確かな御言葉です。そうであるならば、たとえどのような災いや苦難が起ころうとも、私たちは主イエスの御言葉に信頼し、「神の国は近づいている」と悟り、希望と平安を持ち続けることができるはずです。近づきつつある神の国の到来を待ち望みつつ、祈り求めてまいりましょう。